The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉『この子』 : ありふれたことを話題とする「私」
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	語文. 2008, 90, p. 31-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69105
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

樋口一葉『この子』

――ありふれたことを話題とする「私」――

水野亜紀子

一　問題提起

樋口一葉『この子』は、明治二十九年一月刊『日本乃家庭』第二号のうちに収載された作品である。その冒頭には次のようにある。

口に出して私が我が子が可愛いといふ事を申たら、嘸みな様は大笑ひを遊ばしませう、夫れは誰様だからとて我が子の憎くいは有りませぬもの、取たてゝ何も斯う自分ばかり美事な宝を持つて居るやうに誇り顔に申ことの可笑しいをお笑ひに成ませう、

このように「私」は「我が子が可愛い」と語り出す。自明のことを口にすることが滑稽であると「私」が認識していることは「嘸みな様は大笑ひを遊ばしませう」という言葉からわかるだろう。「私」は、滑稽であると認めたうえで、それでも我が子が「宝」だということを語ろうとしている。

「我が子が可愛い」といった自明のこと、つまり一般的にも当然のように思われることを殊更話題にするのは、掲載誌の性格に従って、その求めるところに応じて作品が書かれたためであろうか。[1] いずれにしても、内容が通俗的であると捉えられ、この作品は必ずしも高い評価を得てきたわけではない。[2] そのような中で、一見、誰もが素直に受け入れることのできる常識的な人情を主題に据えているかに見えるこの作品の面白さが、掲載誌のコンセプトによる制約を超えたところに滲み出ているとする立場からの議論もある。小森陽一氏は、作品が掲載誌のコンセプトから受ける制約について述べたうえで「『この子』の〝語り〟の中からは、同時代の「女」をめぐるイデオロギーの体系に押しつぶされようとしている女たちの、悲痛な、声にならない声が聞こえてくる」[3]としている。高田知波氏は「この小説は『日本の家庭』のコンセプトに応じて「罪なきもの」として安易に書かれたどころか、掲載誌の性格と読者の層をじゅうぶん考慮した上での起爆的な仕掛

けが施されていたと見るべきであろう」とする結論を導く中で、「私」の語りの中に「国」のものとしての「家の子」を「私だけのもの」として奪い返そうとする「私」の意識を読み取る。[4]

本論もまた、『この子』に描かれるものが『日本乃家庭』の要請するものから逸脱していると見る。月並みとも捉えられる作品の内容を月並みとして見過ごすことなく、改めて捉え直すという立場から論じていきたい。

『この子』は、「私」が、子をなかだちとして夫婦の不和を乗り越えた現在の時点から過去を振り返りながら語る形式となっている。その語りのスタイルに注目して、関礼子氏は、過去のものとして語られる「私」の「女としての本音の詞」に目を向ける。[5] 嫁いだときから始まる過去の出来事が「今おもふて見ると」など改心した立場から発せられる言葉を挟みながら振り返られる「私」の語りには、過去を悔い改めた今という枠組があるため、関氏のように過去の出来事として語られる「私」の本音や悪妻ぶりに注目し、そこに読者が共感を寄せると見ることも可能であろう。しかし、論者はその枠組によって提示されるものとしての、今の「私」の到達点に目を向けたい。そうすることによって、全く別の主題を見出すことができるのではないかと考えるからである。

二 「私」の語る我が子の可愛さ

『この子』の語りが冒頭から「我が子が可愛い」といった常識的な内容の言葉から始められること、しかもその言葉は常識的であると意識されながら敢えて発せられていることは、語りのなされる現在の「私」について考察する糸口にはならないだろうか。

山田有策氏は「一葉はこの小説で母性に気づくことによって救われる女を描いたのである」[6]と解説する。だが、山田氏がいう意味での「母性」に気付くことが「私」を救ったのだとする読みには検討の余地がある。確かに、子が生まれたその時点において、「私」が子への「母性」に自覚的であることは間違いないだろう。

此坊やの生れて来ようと言ふ時分、まだ私は雲霧につゝまれぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしなかつたのです、だけれども可愛い、いとしい、と言ふ事は産声をあげた時から何故となく身にしみて、いろ〳〵負け惜しみも言ひませうけれど、素つくり誰れかゞ持つて行くとでも成つたら私は剛情を捨てゝ取ついて、此子は誰れにも指もさゝせぬ、これは私の物と抱きしめたで御座りませう。

これは子が産声をあげた当時を振り返る箇所である。傍線部の記述からわかるように、「私」は子の誕生とともに自らの「母性」に気付いている。ところが、その時点においても夫との不和は解消されていない。「雲霧につゝまれぬいて居た」という言葉を用いて夫の子を産むことへの迷いを述べるが、その迷いが夫との不和から生じるものであることから、「私」の中で「母性」による子の可愛さと夫との不和の解消が直接結び付いていないことがわかる。「母性」へ気付くことは、夫との不和を乗り越えるきっかけとはなっていないのである。さらに子が産声をあげた当時を振

り返る別の箇所を見よう。

あゝ何故丈夫で産れて呉れたらう、お前さへ死なつて呉れたなら私は肥立次第実家へ帰つて仕舞ふのに、此様な旦那さまのお傍何かに一時も居やあしないのに、何故まあ丈夫でうまれて呉れたらう、厭だ、厭だ、何うしても此縁につながれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら、厭やな事の、情ない身と此やうな事を思ふて、人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉しいとは思はず、唯唯自分の身の次第に詰らなくなるをばかり悲しい事に思ひました、

ここでは子の誕生を嘆く「私」の気持に言葉が費やされている。「人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉しいとは思はず」など、自分の身上だけを案じて出た言葉も見られる。「私」は子を持つことになった境遇を、夫との「縁」を切りにくくなったという理由で嘆く。生まれた子に対してよりも、うまくいかない夫と自分との関係にばかり意識が向かい、子を「可愛い」とする類の言葉はこの箇所にはあらわれない。「私」は子の死を願ったとさえ述べる。

一葉の作品には、母親の都合によって子が捨てられかねない、もしくは捨てられるものとして描かれているものがある。設定の類似から『この子』と関連付けて論じられることの多い『十三夜』はその一つである。『われから』にも、経済的な理由から着飾れないことを不満に思い、子と夫を捨てる美尾が登場する。一葉は、子の存在と母親の結婚生活の継続の意志が必ずしも結び付くとは限らない様子を描いている。『この子』では、「私」は産声を聞いたときから「何故となく」子の可愛さを感じているが、その一方で自分と夫との関係について思いを巡らせ「厭だ、厭だ、何うしても此縁につながれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら」と嘆く。そのように子の存在の疎ましさを語る「私」の意識は、子を置いてきた自分を「鬼」と呼ぶ『十三夜』のお関の意識とは質的に差があるものの、『この子』においてもまた、「母性」からくる子の可愛さが結婚生活の継続への意欲とは結び付かない状況が浮かび上がることを指摘することができる。

「私」が殊更に強調する子の可愛さは、「母性」からくる子の可愛さだけであるとは考えられない。「私」が「母性」のレベルで我が子を可愛いと感じていることは確かであるが、作中にあらわれる「我が子が可愛い」という言葉は、自然に備わる「母性」のレベルでの可愛さを指すだけに止まらないのだと考えられる。

では、「私」は、どのような過程においてその可愛さを見付け出していくのだろうか。『この子』では、子が生まれても、そのままその存在が夫婦の鎹とはならない状況が描かれる。そのような中で、ある〈気付き〉によって「私」は子を可愛いと思うようになり、その結果、子は夫婦の仲を取り持つものになるのである。ある〈気付き〉を通して「私」の意識に変化があること、そのことにこそ注意を向けるべきであろう。その〈気付き〉は、次のように表現されている。「此無心の笑顔が私に教へて呉れました事の大層なは、残りなく口には言ひ尽くされませぬ」「旦那さまの

思ひも、私の思ひも同じであると言ふ事は此子が抑も教へて呉れたので」「たとへには三ツ子に浅瀬と言ひますけれど、私の身の一生を教へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした」と、子が「私」に「教へ」る存在として語られるのである。子が「教へ」る存在であること、そのことへの〈気付き〉によって、子は「私」にとって「母性」とは異なるレベルにおいて、可愛いものとして語り得るものとなっている。「私」はその〈気付き〉を通して、自身を「情ない身」としか捉えることのできなかった結婚生活に終止符を打つことなく、そこに居場所を見付け出していくのである。

ここで、子が「私」に「教へ」るところのものが「私」にとっていかに重要な意味を持つかということも確認しなければならない。「私」は「学校で読みました書物、教師から言ひ聞かして呉れました種々の事」は身のためにはなるけれども「此子の笑顔のやうに直接に、眼前、かけ出す足を止めたり、狂ふ心を静めたは有りませぬ」といい、子の寝顔は「大学者さまが頭の上から大声で異見をして下さるとは違ふて、心から底から沸き出すほどの涙がこぼれて」と告白する。

「私」は「学校」で受ける教育や「大学者」の教えを引き合いに出しながら、子の「教へ」ることの方が自分のためになったという。それは世間でいう教育ではないけれども、「私」にとっては大切な教えであったとされる。かけ出す足を止めることや狂う心を静めることが「私」にとっていかに有り難いことであったかは、『雪の日』を参照するとわかるのではないだろうか。『雪の日』は「私」と同じく既婚の女性である、珠の回想となっている。そこには「禍ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善とも知らず悪しとも知らず、唯懐かしの念に迫まられて身は前後無差別に、免がれ出しなり薄井の家を」とある。留守番をしていた珠は、外の雪を見ているうちに感情が噴き出し、そのまま好きな人のもとへと駆け出していったのだ。作品は全編にわたり珠の回想として語られるが、その語りは、雪の中へ駆け出していったことに対する後悔に染め上げられたものとなっている。その後悔はまさに、「私」のいう「かけ出す足を止めたり、狂ふ心を静め」るということができなくなったことによる暴発的な行動に対する後悔なのである。

「私」は夫との離縁や婚家からの出奔を選ぶのではなく、子の存在から家庭における自分の身の在り方を見付け出している。つまり、「かけ出す足」を止め「狂ふ心」を静める「此子」は、「私」の結婚生活に対する気持を、受け入れ難く思うことから受け入れて続けていこうと思うことへと変えているのである。「私」は「捨て撥」な態度で結婚生活を送っていたというが、その当時とは異なり、今では離縁沙汰とならなかったことを喜ぶ。結婚生活を放棄しようとする衝動をおさえる「此子」は、「私」にとって、かけがえのない存在となっている。この作品には「私」に「教へ」る存在となった「此子」をかたじけなく思う気持が表現されているといえる。そうした意味で「我が子が可愛い」という

のは〈自分自身で見付け出した子の可愛さ〉についての表白と見てよいだろう。

三　生きる力を獲得する「私」

『この子』は、作品中に設定された聞き手である「みな様」に向ける一人称の告白体となっている。そこでは過去の夫との不和が長々と語られることから、関礼子氏の論じるように[1]過去を語る部分に目を向け、そこに「私」の憂き思いを読み取ることも可能である。そうした読みは、それとして首肯してよいだろう。しかし、それを認めたうえで、「私」の語りが内省的に自己を見つめる点にこそ注目すべきではないだろうか。「私」の語りには、かつての自分の醜さを隠すどころか、むしろ積極的に伝える言葉が多く、それらは決して無視することができないのである。

例えば、「私」は夫を疑う心を払拭できない自分について「一つを疑ひ出すと十も二十も疑はしく成って、朝夕旦暮あれ又あんな嘘と思ふやうに成り」と振り返る。日常の振る舞いについても「お留守に他処からお使ひが来れば、何んな大至急要用でも封といふを切つた事は無く、妻と言じよう木偶の坊がお留守居をして居るやうに受取一通で追払って」など、自分の妻として至らない様子を語る箇所は枚挙にいとまがない。また、過去について語るところには、「私」が自分自身をこのような人間だと規定する言葉を多く見付け出すことができる。「剛情我まんの私」「私のやうな表むきの負けるぎらひ」「私は泣虫で御座いますから」「私が生意気ですものだから」「蓮葉な私」「私のやうに身の廻りは悉く心得ちがひばかりで出来上って、一つとして取柄の無い困り者でも」などである。「私」はかつての自分を敢えて断罪するように否定的な言葉で振り返る。

さらに、周りの人が全て悪いとする「私」の自己中心的な面が熱心に語られていることも見落とすことはできない。「だから此世は厭やな物と斯う極めました」という「私」は自分が嫁いだことについて考えるとき、衝突の絶えない夫を恨み、それだけでは足りず養い親である伯父を恨み、さらには「神様」までを恨んだという。我が身を棚に上げ、全ては周りが悪いのだと「極めて」しまい、自分を変えることなくひたすら恨み抜いたことが告白される。その考え方は、日常生活の中でも変えられることはなかった。周りの者との関係については「何うすれば此様なに不人情の者ばかり集合ふのか、世間一体が此様に不人情な物か、夫れとも私一人を欺かせようと言ふので、私の身に近い者と成ると悉く不人情に成るのであらうか」と考え、「私」は相手が悪いのだと決め付けていたという。

それらの表白から浮かび上がるのは、過去を振り返る中で、自身の醜い部分から目をそらさない「私」の在り方である。「私」は嫌な自分をも見つめて語っている。「私」は家庭の中で女が味わう辛さや怒り、嫌悪を表白するが、それとともに、自身の嫌なところをさらけ出していることにこそ注目しなければならない。そのさらけ出す語りは過去の自分と対峙することを意味しており、

単なる反省のレベルに留まるものではないのである。それは現在と未来を生きるための力を「私」に与えるものとなっている。「私」の得たところの生きるための力は、具体的には次のような箇所に表現されていると見ることができる。

現に今でも隠していらつしやる事は夥だしく有ります、夫れは承知で、たしかに左様と知つて居りまするけれど今は少しも恨む事をいたしません、

ここで「私」は不実をなじった過去の「私」とは違い、夫を許容する姿勢を示している。しかし、それは夫の自分に対する態度が変わったために「私」の態度も変えることができたというのではない。夫との関係は、「私」の心の持ちようによって改善されたというのである。「私」は、自分の心次第で状況を変えることができるという考え方を獲得したことを、経験談として伝えようとする。

同じことが、夫との関係だけではなく、次の引用のように周りの人間との関係のうえでもなされている。

今このやうに好い女中ばかり集まつて、此方の奥様位人づかひの宜い方は無いと嘘にも喜んだ口を聞かれるは、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟つたからの事、

家内を構成する小間使いや御飯たきに対して募らせていたかつての不信感や不満は、今では解消されている。それは彼らばかりに不信感や不満の原因を求めるのではなく、彼らに対する自分の心持こそが原因となっているのかもしれないと考え直したことによる。「私」は自分の心の持ち方次第で夫や周りの人間との関係が改善し得ること、それによって結婚生活を良いものにすることができることを認めている。

このテキストが「私の此子は言はゞ私の為の守り神で、此様な可愛い笑顔をして」と我が子を皆に見せるかのような臨場感を伴い、しかも「みな様」に向けた「私」の告白という形式を取ることを考えると、過去と現在について語る言葉には「私」の脚色があると見なければならないだろう。それゆえ「今は少しも恨む事をいたしません」といった断言もまた、割り引いて捉える必要のある言葉となっている。しかし、周りの見方や考え方を良い方向へと転じさせたことが現在のような良い結果をもたらしたと語る「私」のメッセージに偽りはないだろう。「みな様」の前で語る「私」は、生きる力を獲得しているといえる。「私」は逃げ出したいものから生きるに値するものへと状況を意識的に転換させ、現状を生き甲斐のあるものとして受け入れていく意志の力を獲得しているからである。「私」がそれをなし得たのは、我が身に必要なことを「教へ」る子の存在による。「私」は子の存在を通して、自分の置かれている立場の中で自分の本分を見付け出している。我が子が自分自身の生き方について考える契機を与えてくれたと感じている「私」は、この子に可愛さを見出す。

「私」は「母性」とは異なるレベルで子の可愛さを見出し、生きる力を獲得していったのだといえる。〈自分自身で見付け出した子の可愛さ〉が「私」に内省する力を与え、自分の醜さへの

〈気付き〉を可能にした。「私」は過去の出来事を怨みつらみとして語るに留まらず、能動的な心の働きによる〈気付き〉によってそれを転換させ、生きる力を獲得したところの現在を語る。そのようなところに着目すると、『この子』が、「私」の告白という形をとって女の強い面を描き出した作品であることに気付くだろう。それは女が家庭の中におさまるのか、それとも主体的に独立の道を模索するのか、という問題ではない。その強さとは、自分の生き方について真剣に考え、問いかけをしていくことの持つ強さをいうのである。『この子』には、これまで通り家庭の中におさまりながらも、自分の生き方を獲得する女の姿が描き出されるのである。

四　田辺花圃の作品との比較から

『この子』において、子の可愛さとは、「私」が〈自分自身で見付け出した子の可愛さ〉であった。『この子』に描かれる子の可愛さは、「我が子が可愛い」といった月並みな言葉で語られるにもかかわらず、母親である「私」によって意識的に見付け出されるべきものなのである。そのことを強調する意味で、『この子』が子の捉え方という点において他の作家の作品とは異なる様相を呈していることを明らかにしたい。[8] ここでは田辺花圃の作品を扱うことにする。花圃は歌塾萩の舎での一葉の姉弟子であり、一葉が花圃から刺激を受けて小説を書き始めたことは有名である。花圃の著した小説で子の可愛さにふれる次の三作品を参照したい。

『五月幟』（『うらわか草』明治二十九年五月）、『玉椿』（『女学世界』明治三十四年一月）、『玉すだれ』（『婦人界定期増刊　閨秀文学』明治三十六年一月）である。

作品の発表された順番とは異なるが、まずは『玉椿』を見たい。『玉椿』には、家を空けがちな夫の帰りをただ待つばかりの女主人公に対し、髪結いが「それも亦御子でもあれば、よいも、わるいも、たゞ子可愛しで、まぎれてしまひますけれど」という場面がある。女主人公がその言葉を思い出し「子といふなぐさめ艸のなき身は」と我が身を思う場面も用意されている。夫と自分の関係がうまくいかない中で子を「なぐさめ艸」とする発言があることから、子は無条件に可愛いものであるという考えや、子が存在することだけで母である自分が救われるという考えをそこに読み取ることができる。

次に『玉すだれ』であるが、そこには夫との仲がうまくいかない友が「子といふくさびのきりがたくて」と手紙で告げたことを女主人公が思い出す場面がある。別のところには「子は家のかため」という言葉も見られ、そこには子が鎹になること、そして子が「家」の子として育てられるべきものであるという考えがあらわれている。

最後に『五月幟』であるが、これは先に挙げた花圃の作品の中で最も早く発表されたものである。『この子』の発表された時期とごく近いこともあり、詳細に内容を検討したい。

『五月幟』では「絹地の鯉」を眺める団欒の場で、その家に久

しく仕える「老僕」によって家の思い出話が披露されるが、「老僕」の語りの中には子に関して注目すべき点がある。過去の出来事を語る合間に「老僕」の意見として次の言葉がある。

人の楽の種々ある中に、およそ子許り、たのしきはあらじ（中略）女の楽しみの、もともおもなるは、此子挙て生したつるにて、赤児のほど、乳ふくまするぞ、愛の一さきにあらはるはじめなり。

エピソードとエピソードの間に主張されるのは、子を育てることは人にとっての、特に女にとっての「楽しみ」であるという考えである。この「老僕」の主張は作中で一貫している。ちなみに、この作品では「老僕」自身が一日も赤児の顔を見ないでは過ごせないほどの「子煩悩」と設定されている。

「老僕」の思い出話では、美しい隣家の嫁が「産後の肥立のよからずして、実家へ養生に帰りたまひし留守のまに」、その家に仕える下女が夫を取った話が語られる。「老僕」はそれを次のように語る。

其子につけて、ことに夫婦の間もむつまじくなりまさりぬべきものを、彼の嫁様はいかにぞや、くさびとなるべき子をあげて後に、かく思はずなる成果を見んとは、実家へ帰らん折は我さへも思ひかけざりし事なりけん。

子の存在によって夫婦の仲がむつまじくなるはずであるのに、隣家の嫁は子を産んだために下女に夫を取られたと、子が「くさび」にならない様子が語られる。そこでは子は鎹となるべきものだという通念が示され、それを反転させた出来事が伝えられている。

嫁は夫から「家にかへらずとも、行末ながく実家に養生せよ」と突き放された後も「夜も、昼も、たゞ〳〵子の事を思ひつゞけ」ているとされ、「老僕」の語りでは嫁の我が子に対する思いの強さが印象付けられる。『五月幟』における「老僕」の思い出話は、隣家の嫁が愛すべき我が子との間を裂かれ自害するに至った悲劇を語る。その中では嫁の我が子への一途な愛が強調されており、全編を通して子への愛というものが疑われることがない。それは「老僕」の語りを聞き終えた人々が「其嫁の心のいとほしさよ、悲しさよ、など鼻をもかみわたさる」と、皆が皆、終始我が子を思い続けた嫁に対して同情的であることからもわかる。『五月幟』においては、母親の子への愛が当然のこととされているのである。

『五月幟』では通念のレベルにおいて子の可愛さが捉えられており、そのうえで子が夫婦の鎹となり得なかった出来事が語られる。一方『この子』では、冒頭の「我が子が可愛い」という発言が通念のレベルにおいて発せられているのではない。そこで語られるのは「私」が〈自分自身で見付け出した子の可愛さ〉である。「私」が子の存在によって自分の生き方を見付け出していく過程を経て、初めて「我が子が可愛い」という言葉が発せられているのである。

こうした『この子』と『五月幟』の間における子の捉え方につ

いての相違の背後には、両者の影響関係の問題がひそんでいるかもしれない。花圃の『五月幟』は、『この子』における、結果として夫婦をつなぐ鎹の役割を果たす子の在り方を、その誕生が夫婦仲を壊すという逆転させた形で登場させたように見える。子が生まれたせいで夫婦が離れてしまう『五月幟』の構図は、子の存在が夫婦の仲を取り持つ『この子』の構図を反転させたものと捉えることができる。その意味で、『五月幟』は一葉の『この子』を意識して創作されたものではないかと考える。この時期における一葉と花圃の関係を思うとき、そのような可能性を想定してみたいのである。

『この子』は一見すると、子を産んだ女を語り手とした、ごくありふれた内容を扱う作品に見える。しかし、その内実は、女が子の存在から我が身の在り方を改めて考える契機を得た喜びを語るものとなっている。これは子への思いが書き込まれる『五月幟』のような他作品を参照しても、『この子』特有のものであることがわかる。

注

(1) 和田繁二郎氏(『明治前期女流作品論』桜楓社、一九八九、四六四頁)や、橋口晋作氏(「「この子」の作品世界について」『解釈』一九九一・五)は、掲載誌との関連から作品の通俗性に言及する。一葉の受け取った有明文吉(『日本乃家庭』の発行人兼編集人)からの執筆依頼状に「文章は可成平易に」とあること、寄贈された第一号の「発刊のことば」には、この雑誌に掲載する小説が「野卑ならずして、面白く人情世態の隠微を穿ちて、而かも飽まで罪なきものを撰み、無事なる時人の心を慰め、或は家族団欒して茶呑話などする折の和楽を増すの幇助たらしめ」るものであると書かれていることなどを勘案すれば、『この子』が掲載誌の要請に合わせて創作されたとする見解も納得できる。

(2) 「何処となく間伸びがして居る様で、極短いものであるにかゝはらず、退屈な感じのする作である」(湯地孝『樋口一葉論』至文堂、一九二六、三〇七頁)など。

(3) 小森陽一「囚われた言葉／さまよい出す言葉―一葉における「女」の制度と言説―」(『文学』一九八六・八)

(4) 高田知波「『こわれ指環』と『この子』」(『日本近代文学』一九九二・十)

(5) 関礼子「樋口一葉『雪の日』『この子』の語りをめぐる一考察」(『嘉悦女子短期大学研究論集』一九八四・十二)

(6) 山田有策「『この子』脚注」(『全集樋口一葉2　小説編二　復刻版』小学館、一九九六、一八四頁)

(7) 関礼子、前掲論文

(8) 『この子』論において他作品を視野に入れた論考には、清水紫琴『こわれ指環』との対照性を論じる高田知波氏のものがある。(高田知波、前掲論文)

一葉作品の引用は筑摩書房版『樋口一葉全集』(一九九四)に拠る。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。

―本学大学院博士後期課程―